

民主化する神々

1990年代以降のベナンにおける 政治と伝統信仰

田中正隆

はじめに

西アフリカ、ギニア湾岸に面するベナン共和国は、1960年、仏植民地体制からの独立を果たし、マルクス・レーニズム体制による近代国家統一を企図してきたが、社会主義体制の崩壊によって、民主化路線へと転じた。90年代以降、国民会議主導によって政治システムが複数政党制へ順調に移行し、一時はアフリカの民主化プロセスのモデルとなった(Noudjenoume[1999:10])。こうした政治的変遷に加えて地域研究者の注目を集めたのは、奴隷交易の拠点であったという歴史性と、カリブ海地域で再編され、現在も多様に増殖しつづける、神格化された祖先霊ヴォドゥン(vodun)をめぐる信仰の源流であるという宗教的諸特徴であった。ヴォドゥンとは神霊であり、超自然的力であり、同時にその具象であり、信仰自体をも同一の語で表す。この信仰のもつ、多彩な神々を祀る万神殿(祠)、秘儀性を帯びた儀礼実践、排他的で階層的な結社による活動という特徴に関しては、すでに人類学的研究の蓄積がある[†]。カトリック25.9%、

イスラム20.6%に対して35%を超す(1992年政府統計)信者をもつこの信仰は、今日まで根強く浸透している。

ところで、1980年代以降のアフリカ政治学における市民社会論は、民主化へと転じた諸国における市民主体の発展を、その潜在的な抗国家性や国家と社会との独特な融合を認めつつ、明らかにする議論をつみ重ねてきた(Bayart et al. eds. [1992: 17-21]; 遠藤 [2001:169-176])。90年を境に、各国の政治体制は、権威主義的な無党、一党体制から複数政党制へ移行し、自由選挙による議会、大統領選挙を実施している。だが、こうしたいわば手続き上の形式的民主化がもつ限界に対して、とくに仏系政治学サークルの関心は、現代政治の領域において、従来は文化的領域とされてきた宗教的要素の重要性を認識し、それらがいかに密接に連

† 1 人類学的先行研究にはト占に焦点をあてた初期の体系的研究である Maupoil [1981(1936)] や、ダホメの政治、経済とともに信仰活動を詳細に記述した Herskovits [1967(1938)] がある。近年でも De Surgy [1988], Rosenthal [1998] が、それぞれ神格、霊魂観や、憑依を主題に論じている。

関し、現実の場を構成しているのかを解き明かすことに向かっていった (Bayart ed. [1993]; Constantin and Coulon eds. [1997])^{†2}。彼らは地域紛争や国家(国家間)の政治問題という可視的現象の解明のために、宗教的、文化的、そして象徴的要素の関与を、積極的に検討しようとしているのである。

このようなアフリカ政治学の論調は、近年の人類学における、神秘的観念や宗教領域の政治-経済性や現代性(近代性=modernity)を再考する議論とも交叉している(Comaroff and Comaroff eds. [1993]; Moore and Sanders eds. [2001])。両者の歩みよりは、現代社会の状況において、宗教-文化領域と政治領域をそれぞれ独立させ、一方を他方を説明するための単なる補助因子や従属変数とみなすことが困難であるという認識を共有するためと思われる。従来、社会背景として記述されていた宗教-文化あるいは伝統といった諸要素が、むしろ政治的領域を構成する本質的要素として機能しうること、近年の研究は解き明かしつつある (Constantin and Coulon eds. [1997:20])。そこで、たとえばモダニティやオカルト、市民社会といった諸概念が、研究者側だけでなく対象社会のなかで独自の展開を見せているのなら、彼らがそれをどのような文脈において用いているのかを丹念にたどり、そこから見えてくる彼らの現在を具体的に記述することが、必須の作業となるだろう。本稿はこうし

た問題意識により、ベナンの現在においていかなる形で政治と宗教とが交叉しているのかを、具体的な事例から検討してみたい。以下では、1990年代以降、ヴォドゥン信仰が「伝統文化」と読み替えられ、「民主化」とすると語られる状況を、いくつかの文化政策のなかに追ってみる。

1 民主化と芸術・文化祭

ベナンは、1990年、西アフリカの他の国々に先駆けた国民会議を開催し、暫定政権で首相を務めたソグロ氏が、民主的選挙をへて大統領に就任した。その選挙の翌年、92年4月に政府はヴォドゥン芸術・文化祭の実施を告知した。ウイダ92と名づけられたこの祭祀は、経済首都コトヌ、行政首都ポルトノヴォ、そしてウイダの3カ所で並行して開催された。その目的は、大きく二つ挙げることができる。第1に南部を中心に広がる伝統信仰ヴォドゥンを、国家全体の精神的支柱として再評価するということ。第2に奴隷交易という悲劇的事実を批判的に捉え返し、歴史観の共有をはかることである。こうした目的から、ヴォドゥンをめぐる芸術と文化に世界中に離散した黒人奴隷の歴史性を重ねることで、この信仰の普遍性や世界性を見出し、その再活性化をもくろんでいた (Tall [1995:200])^{†3}。この祭祀には、国内に限定されず、ブラジル、キューバ、ハイチ、アンティエユ(仏領)、アメリカやアフリカ諸国など諸外国の多くの文化人、芸術家の招聘が企画されていたのである。

注目すべきなのは、この芸術・文化祭に際して、ベナンの人々の間でヴォドゥンと「民主化」が活発に議論されるようになったことである。ヴォドゥンに世界性や普遍性を見出す芸術・文化祭は、しかし、それゆえにこそ、地域間の信仰の齟齬からくる諸問題を明るみに出し、各方面で論争が卷

†2 複数政党制や自由選挙による大統領選挙などの、政治的手続き上の民主化から10年を経てもなお、実質的な民主化と乖離したり、政治的不安定が続く現状を解明することが、現代政治学の課題となる。政治学雑誌『ポリティック・アフリケーヌ』(*Politique Africaine*)誌が、積極的に宗教や妖術の特集号を組むことから窺われるように、これに寄稿する論者たちは、従来の政治-経済領域を越えた範囲にまで議論の射程を広げている (Constantin and Coulon eds. [1997:18-24])。



不帰の門（La Porte du non retour）：門のレリーフに描かれているのは、後ろ手に縛られ浜へと連行された黒人奴隷たち。門の向こう両端にはエングングン（祖先蘇り神）のオブジェが2体みえる。



定期祭祀において不帰の門から浜辺の儀礼場へと行進するウノ氏と随行員（ヴォドゥンシ）。

き起こった（Tall [1995: 200-202]）。たとえば、芸術・文化祭の開催地をめぐる議論があった。ダホメ王国（17世紀中葉～1894年）の発祥地であるアボメでの開催を主張する人々と、やはり旧王都であるアラダでの開催を主張する人々とが互いに正統



2001年度ユネスコ無形文化財に指定されたゲレデ仮面ダンス。野外劇場で芸能集団によって「上演」されている。

性を主張し、反目しあっていた。ヴォドゥン文化の伝統性を体現するのはわが都市の歴史において他にはない、と双方が主張しあっていたのである。にもかかわらず、結局芸術・文化祭はこれらの都市ではなく、ウイダを中心とした上記3カ所で実施されることになった。

また、奴隷搬出港という歴史性をもつウイダと、旧王都アボメには、それぞれベナンを代表する伝統祭司長がおり、祭祀の主導権をめぐる対立があった。それが、ウイダ祭司長ダボ・ウノとアボメ祭司長ソサ・ゲデウングの対立である。1991年5月、ベナンの6地域からなる祭司代表が集まり、ヴォドゥン信徒の組織化について討議する集会が開かれた。そのときにウイダ祭司長、ウノ師が議長として選出された。それ以降、ウノ師はベナン全体の祭司長を自ら名乗りつづけたが、各地の信

† 3 この国家的祭祀はもともと、ハイチで1989年に催された「記憶の環—奴隷の道」フェスティバルに触発されたものであった（Tall [1995:206]）。したがって、当初企画されていた「再会1992ウイダ国際フェスティバル」という名称が示唆するように、伝統信仰と奴隷制の歴史記憶を再認識することを目的としていた。これはまた、歴史と伝統を文化的資源として積極的に読み替え、国際的な協調へとつなげてゆく試みでもあった。民主的選挙によって当選した

ソグロ大統領が、私財をも投じて打ち出した新たな文化政策として、これに対する人々の関心も高かった。こうしたなか、92年にドミニカで開かれた伝統文化祭に招かれたベナン文化省庁大臣は、ヴォドゥンの宗教文化をベナンだけに限定するのではなく、世界規模での多様な展開と普遍性を積極的に評価すべきだと、早くも提言している（『ナシオン』紙1992年11月27日）。

徒や要職者たちはそれを認めなかった。特にその正統性に異議を唱え、対峙することになったのが、アボメの祭司長、ゲデウング師である。各地の司祭たちの間では、むしろ彼を最高司祭に推す声が多数派を占めていた。両者の和解のために「民主的」に協議しようと、ポルトノヴォで祭司合同集会が開かれたが、当のウノ師がこれを欠席してしまう。このような経緯によって、両者の対立は深まり、また各種メディアがこれを報道したために、一般の人々も知るところとなった。各方面からのとりなしもあり、両者の溝はウイダ祭実施を経てからのちに次第に修復されていった。

このような宗教者側の葛藤とは別に、一般の人々の間でも、政府主導の文化振興策について活発な議論が重ねられるようになる。統合化されないまま南部各地域に展開していたヴォドゥン結社に対して、政府は対話の窓口となる代表者を選出し、諸結社の組織化を進めていた。ウノ師を議長とするヴォドゥンカルト高等委員会 (HCCV) の創設がその一例である (Tall [1995:205])。1992年9月25日の『ナシオン』紙上には、こうした働きかけをヴォドゥン信仰の「政治化」と捉えて糾弾する文が寄せられている。その記事は「ヴォドゥンはもともと多様態として存在し、……祭祀も地域ごとの独自の発展をとげていたはずである。それに対して……全ヴォドゥン信徒の代表を選出し、5年を任期として交代するという政府による改革案は、社会的葛藤の要因となり、精霊への誤解をうむ危険が大である。責任者たちはすみやかにこの提案を無効にせよ」といった内容で手厳しく批判している。また10月19日付け同紙では「ここで留意すべきなのは、アボメのゲデウング師は国家祭祀の実施を自分から懇願したことなどいまだかつてなかったということだ。ウイダ92はウノ師のお膝元で行なわれる。現在のベナンの最高司祭であるゲ

デウング師が、いまだ関与していない理由について問い正すべき余地はある。(ウイダで祭祀を実施するという) 国家の姿勢は、ウノ師との共謀を意味しているのではないか？」という挑発的な文面を掲載している。こうした論調は、聖性と独自性をもつ伝統信仰に世俗的な権威づけを与え、不必要に「政治化」させたことが引き起こしたのだといえる。

確かにその後の経緯を追ってみても、政界と宗教界との不透明な癒着が窺われることは事実である。たとえば1995年3月の国民議会選挙に先立って、政府はイスラム、カトリック、そして「伝統」信仰の祭司を招いて、時事問題の意見交換のための会合を行なっている (1995年1月)。また大統領と与党 (ベナン再生党 PRB) は宗教指導者たちに対して選挙戦への祈念を繰り返し依頼している。このような集いの場において、世論を喚起し信者達の票田を確保するように、政府側から宗教指導者たちへ強い働きかけがあったと明言する人々もある (Mayargue [1997:157-159])。ソグロ大統領の強い後押しで進められたヴォドゥン信仰の伝統文化化には、支持基盤を固めようという行政側の思惑が見え隠れしていたのである。

2 奴隷交易という記憶

ヴォドゥン信仰の伝統文化化に加えて、ウイダ祭で意識化されたもう一つの要素は、奴隷交易への歴史認識であった。これに関連して、ユネスコの世界遺産指定を機縁に、1994年「奴隷の道」の記念式典が開かれている。世界の多様な文化への理解を深め、その背景や歴史を学ぶために、ユネスコは遺跡、文化財、自然を世界「遺産」として登録している。85年、ダホメ王国に栄えたアボメ王宮が指定されたのに加えて、94年にはウイダの

中心から海岸にいたる道が「奴隷の道」として世界遺産に登録された。この機縁から「不帰の門」記念碑が建設され、翌95年には国際寛容年の記念式典がベナンで開催された。この式典にはソグロ大統領、ユネスコ事務局長マイヨール氏、国連事務総長ガリ氏が列席している。

1727年ダホメは海岸部都市ウイダ、グランボポを支配下にいれ、奴隷交易の実権をにぎる。ダホメ王国は18世紀、隣接集団との戦争によって得た捕虜をフランス、ポルトガルをはじめとする西欧商人に売り、さらに軍備を拡張してゆくことで最盛期をむかえた。当時、アボメからウイダにいたる道のりが奴隷の道（搬出経路）となったのである。かくしてウイダは交易による西欧的要素と土着信仰の要素が混在する独特の宗教様式をそなえた土地柄となる。17世紀半ばから19世紀に至るまで、ベナン湾岸からおよそ200万に達する人々が「積荷」にされた（Manning [1982: 9-12]）という。だが、この悲劇はアフリカ社会内部の仲介商人の活動によって成立していたことも事実であった。それゆえ、交易に携わった者が他ならぬ自らの同朋たちであったという葛藤の種を、この悲劇の歴史は宿しているのである。

アフリカ社会内部の仲介商人として活動したフォンに対して、被害者であったミナ、ナゴ（ヨルバ）、マヒ民族集団の間には、今日にいたるまで敵意が残存している（Law [1989:51-59]）。そして、そのことに彼ら自身意識的である（『ナシオン』紙 1992年11月27日）。1997年のアフリカ旅行協会会合では、アメリカやアンティュークから来訪した（黒人）記者たちが、ウイダの守護神殿、聖なる森、不帰の門などを見学することとおして、アフリカ系離散民とアフリカ人との奴隷交易という歴史的経験の共有を確認している。そして、会合の席上で、フンベジ（Gatien Hounbedji）通産・観光大

臣は、「なぜわれわれは機械製品や最新鋭の武器や金銭と引き換えに、自らの同朋を売り渡したのだろうか」と自らに問いかけ、聴衆の心を動かしたという。つまり、歴史的事実としての奴隷交易に言及するときは、彼らは決して一枚岩な被害者ではない。歴史的事実の想起は社会的葛藤を浮かび上がらせる。むしろ彼らの内部に、被害者でありかつ加害者でもあったという疚しい記憶が生きつづけているのである。

ところが、奴隷の道を歴史遺産とし、式典を開催することによって、国内における民族集団間の潜在的対立図式は、歴史的悲劇のコメモレーション（＝記念・顕彰行為）という形でメタレベルに置き換わる。そして、確かに大統領をはじめ、政府高官が積極的にこうした行事に介入することは、国内の不和を抑圧しつつ対外的には政治的な示威活動となる面がある（Mayargue [1997:151-153]）。その意味で、ヴォドゥン信仰と同様に、このコメモレーションもまた特定の人々にとって「政治化」する対象となりうる。だがこの歴史遺産化を境にして、奴隷交易の悲惨な事実が広くベナンの人々にとって恥辱や汚名を意味するものではなく、なってきたことは、報道資料から読み取ることができる。民族間における遺恨の源泉であるがゆえに伏せておくべきではなく、不帰の門のようなモニュメントを建造することで、むしろ奴隷交易の被害者としての「黒アフリカ人」を表象化する。西欧人に代表される「白人」は、その対立項におかれる。そして、奴隷制は民族対立をはらんだ地域史の事実としてよりも、人類が記憶に残すべき犯罪行為であると捉え返される。歴史的悲劇をいわば負の遺産とすることによって、国境を越えた融和と連帯の精神をベナンから発信すべき、と彼らは語りだしている（『ナシオン』紙 1999年1月19日）。

3 定期祭祀の広がりとヴォドゥン信徒の社会活動

1997年にはケレク政権のもとで、毎年1月10日をヴォドゥン祭とする条例が制定された(97-031条)。この国家公認化によって、ウイダ、アボメなどの南部都市に限定していた祭祀が、サヴェ、パラクなど中部や北部都市でも開催されるようになった。定期祭祀の国家公認化は、国内外の報道機関を継続的に招来し、新たな観光資源とするもくろみがあったのかもしれない(Tall[1995:199-201]を参照)。確かにこれが一義的な要因とまではいえないが、民主化以降のベナンにおける観光産業が着実な発展を遂げていることは、次のような数値からも窺われる。観光省の統計によれば、1993年に概算14万人であった観光客が96年には14万7000人、98年には15万2000人、2000年度には16万3000人となっている。それにともなう観光収益は162億 CFA フラン(93年)、173億9000万 CFA フラン(96年)、220億2000万 CFA フラン(98年)とのび、2000年度には237億5000万 CFA フランに達している(2001年度観光省統計)。2000年度のこの国の商業、サービス部門での収益総額(6988億 CFA フラン)と比較しても、後発産業として徐々に根づきはじめていることがわかる。だが定期祭祀の実施は、このような観光資源が与える地域的な経済効果という面だけに止まらない。

毎年1月10日前後は、国内外のマスメディアが祭祀に押し寄せる。その席における祭司長や地方の名士によるスピーチが報道され、広く一般の人々へのメッセージ性を帯びてきたことは注目に値する。たとえば1997年、ポルトノヴォにおける祭祀の場では、各郡から集まった30もの民俗舞踏、民謡集団による演舞が華やかに繰り広げられた。そして、列席した地方議員から、ヴォドゥンと

もにベナンの芸術、文化を広く「民主化」してゆくべし、という宣言がなされている(『ナシオン』紙 1997年1月6日)。あるいは99年、コトヌでの祭祀には、セネガル、コートディヴォワール、ハイチからの来賓とともに、ゲデウング師、ウノ師両者が出席した。席上、ゲデウング師は、ヴォドゥンが寛容、連帯意識、そして霊性の源として歴史に果たした役割の重要性を指摘し、それゆえに、ベナン国内のみならず、世界に広がった離散黒人を兄弟姉妹として一体化してゆくべきと述べた。このようなヴォドゥンのもつ宗教性や歴史性、伝統性をもとに、世界的な連帯をよびかける発言のなかで、しばしば「民主化」という語彙が引用される。

このようにヴォドゥン信仰の伝統性、倫理性や固有文化性を「民主化」に結びつける語りは、政治家側の発言だけに特有なものではない。宗教者側も次のような活動を、「民主化」と結びつけようとしている。たとえば、ヴォドゥン信徒が率先して、国家の進める教育水準向上政策に参加しようとする動きがそれである(Mayargue[1997:146])。63%を超すという国家全体の非識字率(1996年)の改善に、政府は児童の就学の推進と使用言語のアルファベット化を勧めている。そこで、かつてのように信徒たちが世俗から断絶し、聖なる森にこもるのではなく、結社活動と就学生生活を両立し、識字化教育を受講しようと努力を始めている。さらにはNGO組織と協力して、そのノウハウを吸収しながら、信徒も通える学校を創設しようという具体的な計画までが立ち上がっている(『ナシオン』紙 2000年8月30日)。このような動きは、以前には見られなかったものである。また、先述のゲデウング師は、9月の新学期開始に際して、精力的に小中学校におもむき、学業成就と無病息災のために、ヴォドゥンをよびよせ、祈りをささげる儀礼を執り行っている(『ナシオン』紙 1992年10月

5日)。これは、学校行事の中に信仰活動を根づかせようとする試みといえる。そして、彼はヴォドゥンが邪悪な神への信仰だという偏見を是正しようと、多くの場やメディアを前にして積極的に発言している（AP通信 1996年2月26日）^{†4}。こうした活動や発言からは、とくに道德教育面において、ヴォドゥンを社会政策に関与させようという宗教者側の模索を読み取ることができる。

おわりに

小論では、民主化以降のベナンにおける代表的な文化振興策として、芸術・文化祭（ウイダ92）をとりあげ、そこにおける伝統信仰再興と奴隷交易の負の遺産化という主題に連なる、いくつかの文化政策を列挙してきた。繰り返される祭祀、記念碑建設やそのコメモレーション、そして宗教者たちの個性的な活動では、ベナン人における伝統的価値観の復権が強調されている。こうした動きは、芸術・文化祭における宗教者同士の葛藤や、奴隷の道メモリアルにおける民族集団間の不和のように、内部に葛藤をはらんでいることも確かである。しかし、祭祀の場における数々のメッセージは、離散黒人という外部の存在や、奴隷交易を人類全体の歴史的悲劇とする意識化によって対立を連帯へと反転させようとしている。こうしたメッセージが、マス・メディアの報道を通して、国内だけでなく国外にむけても発信されているのである。

このような展開における「民主化」という語りは、国民統合のために一部の政治家が利用する

符牒だけではなくなっていることがわかる^{†5}。すなわち、国民の主體的な政治参加を保証し、自由選挙制によって政治に民意を反映させるという、いわゆる政治学的な意味のそれに限定されないさまざまな文脈において、「民主化」が使用されている。ヴォドゥンの「民主化」の内実を整理するのならば、(1)社会活動へ積極的に参与すること、(2)秘儀的、排他的イメージを払拭し、開かれた倫理宗教としてヴォドゥン信仰を再評価すること、(3)国家を超えたグローバルな結びつきを行事において体現化するという、少なくとも三つの要素を見いだすことができるであろう。そして、本稿で列挙した行事が、政治家や宗教者のみならず一般の人々の間でも、「民主化」という語彙を用いて意見を交わす場を提供してきたことは無視できない。

1990年以降のベナンの状況では、言説や記念行為をとおした「文化」的実践の社会に占める比重が、政治や宗教の枠を越えたあらゆる場面において増大しつつある（鈴木 [2000:73]）。第1節、第2節でみたような地域住民や宗教者、そして民族集団の間に浮上した葛藤や対立も、確かに民主化の実践の副産物であるかもしれない。だが彼らは「民主化」を単に西欧概念の輸入としてではなく、むしろそれを自らの文脈に置き換え、対話や交流の起点としているようにも思われる。それは奴隷

†4 多くの場で「ヴォドゥンは秘儀的儀礼や妖術の巣窟なのではなく、その信仰実践が、親和と連帯をめぐむベナンの歴史の基層をなしてきた」と説き続け、信徒たちに大きな影響力をもったゲデウング師は、2001年1月27日、89歳で死去した。

†5 政府主導の奴隷の道プロジェクト（1994年）の実施は、ユネスコからの相当額の経済的援助のもとに行なわれていた（Mayargue [1997:152]）。だが99年度の「寛容と和解の行進」では、アボメ王家責任者が参加し、4キロほどの「奴隷の道」をたどる行進行事が催された（1月17日）。また、同年の12月には和解と発展のプロジェクトと称する会合で、西欧人記者団も招いて、歴史的悲劇への和解の提言（贖罪サミット）がなされている（12月2～3日）。こうした動きは、国家主導からむしろ市民主体のメモリアルの実践へという色彩が強くなってきていることを示している。

交易に内在する遺恨や葛藤を認識しながら、コモレイション化によって積極的に外部との対話を模索してゆく試みに見て取ることができる。少なくとも多義性をもつ「民主化」を起点とすることで、政府による振興策だけでなく、民間宗教者の社会活動が、近年では一般市民の活動ともあいまって一層の多角化、具体化を進めていることは事実である^{†6}。そして、そうした活動が一過性のもものだけにとどまらないことは、複数年度にわたって会合が継続されていることや、隣接アフリカ諸国の連携をはじめとして、その範囲が拡大してきていることから明らかである。そうであるならば、彼らが「民主化」という語り口でめざすものが流動的であり、たとえ「真正な」政治学的定義からは逸脱してゆくものだとしても、その語りが現実になどのように機能し、また彼らが何を実現しようとしているのかを、地域社会、国家、国際社会という多層的な文脈から理解してゆくことが重要となると考える。

＜参考文献＞

- 遠藤 貢 [2001]「アフリカをとりまく市民社会概念・言説の現在——その位置と射程——」（平野克己編『アフリカ比較研究——諸学の挑戦——』アジア経済研究所）147～186ページ。
鈴木亨尚 [2000]「アフリカにおける民主化のオータナティブ——革命としての民主化——」（『国際政

治』第125号）61～78ページ。

- Bayart, Jean-François ed. [1993] *Religion et modernité politique en Afrique noire*. Karthala.
Bayart, Jean-François et al. eds. [1992] *Le politique par le bas en Afrique noire*. Karthala.
Constantin, François and Christian Coulon eds. [1997] *Religion et transition démocratique en Afrique*. Karthala.
Comaroff, John and Jean Comaroff eds. [1993] *Modernity and its Malcontents: Ritual and Power in Postcolonial Africa*. University of Chicago Press.
Herskovits, Melville J. [1967(1938)] *Dahomey: An Ancient West African Kingdom*. Vols.1,2. Evanston, IL: Northwestern University Press.
Law, Robin [1989] “Slave Raiders and Middlemen, Monopolists and Free-Traders : The Supply of Slaves for the Atlantic Trade in Dahomey c.1715-1850.” *Journal of African History*, 30: 45-68.
Manning, Patrick [1982] *Slavery, Colonialism, and Economic Growth in Dahomey, 1640-1960*. New York: Cambridge University Press.
Maupoil, Bernard. [1981(1936)] *La géomancie à l'ancienne Côte des Esclaves*. Institut d'Ethnologie 42. Paris : Musée de l'Homme.
Mayargue, Cédric [1997] “Démocratisation politique et revitalisation religieuse. L'exemple du culte vodun au Bénin.” In Constantin and Coulon eds. [1997 : 135-161].
Moore, Herrietta L. and Todd Sanders eds. [2001] *Magical Interpretations, Material Realities: Modernity, Witchcraft and the Occult in Postcolonial Africa*. Routledge.
Noudjenoume, Philippe [1999] *La démocratie au Bénin : Bilan et perspectives*. L'Harmattan.
Rosenthal, Judy [1998] *Possession, Ecstasy, & Law in Ewe Voodoo*. University of Virginia Press.
De Surgy, Albert [1988] *Le système religieux des Evhé*. Paris: L'Harmattan.
Tall, Emmanuelle K. [1995] “De la démocratie et des cultes voduns au Bénin.” *Cahiers d'Etudes Africaines*, 137, 35-1:195-208.

（たなか・まさたか／日本アフリカ学会会員）

†6 多角化の例としては、WHOの健康概念の再定義化をうけて、医療・社会福祉分野における宗教性や霊性の復権を呼びかけたり（アフリカ伝統的霊性への国際会議）、国政における汚職防止の呼びかけなどに発言し、国民意識を喚起させたり（生活モラル向上のための国民セミナー）、隣接諸国とも連携して、アフリカ伝統文化復興の式典や、伝統王家の権威と国政との関わりについてのシンポジウム（伝統王権についての国際会議、アフリカーアフリカンアメリカン・サミット）を積極的に推進していることなどが挙げられる。